と・このこと

石坂洋次郎

東方社版

あのこと・このこと

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和四十一年八月十日発行

定価四五〇円

著作者　石坂洋次郎
発行者　石渡磨須子
整版者　内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇
発行所　東方社
振替東京五七七七四番
電話（九四三）四四五一～四番

（印刷・邦文堂印刷所）

© 1966 Tohosya Printed in Japan

あのこと・このこと

石坂洋次郎

目次

ディケンス「二都物語」の面白さ　七
私の服装三代記　一一
タロの話　一四
おせつかい　一八
娘の結婚について　二三
希望新たに　三三
外国人のいるお正月　三五
新しい愛国心について　三九
夏の夜の出来事　四三
家について　五四
日本の芸術　六四
軽音楽述義　七〇
豚はジャンプの名人　八〇
フィリピンで観たアメリカ映画　八八
木割り　九三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

地方文化の問題　一〇一
鶏物語　一〇五
似たような話　一一〇
冬ごもり　一一三
小説以前　一一六
外地で見た日本映画　一一三
貫くもの　一一九
夜の客　一一四
協力・そのほか　一一〇
妻は下婢ならず　一一五
三田ッ児　一一〇
報酬沢山　一一五
酒席の感想　一一七
世界お伽噺　一一二
勤労者訪問記　一一六
「何処へ」の映画化　一一三

早婚座談会　二〇七
わが郷土　二一五
村童と紳士　二二四
新郎K君　二三〇
困った話　二四九
わが行く道　二五二
水上滝太郎全集第五巻　二五五
年頭菓子談義　二五八
新生活の設計　二六一
私の声　二六四
随想　二六八
写真に添えて　二七二
横手の町　二七四
葛西善蔵氏の覚え書　二七七

装幀　御正伸

あのこと・このこと

ディケンス「二都物語」の面白さ

山荘生活の楽しみ

今年の夏も軽井沢で過した。私共の借りた上二室、下二室という別荘は、きわめて簡素なつくりのものだつたが、樹齢何百年というトチやブナの樹に囲まれて、家の中には一日中、緑の陰が出来ており、すぐ傍の小いさな堰を、冷い山の水が勢いよく流れていた。

朝、二階の寝床で目が覚めて、夢のつづきのような流れの音を意識すると、おや、今日は雨かな、と毎朝のように思つてしまう。で、起きてガタピシした雨戸を繰ると、樹々の枝や葉の間をくぐりぬけてくる青いさわやかな日光が、サッと室の中にさしこみ、身体中の活力が一時によみがえるような気がする。

「あらたふと青葉若葉の日の光」という芭蕉の句は、どんな場面を読んだのか知らないが、都会の塵埃で汚されない、山の中の緑の樹々の葉に日光があたつているのは、ほんとに美しいものだ。

私共の家では、お天気の日は、二階の寝室の東と南に面したガラス障子をすつかりとり外すことにしているので、室の中には、戸外と同じような空気が流れている。そこの緑の陰がうつる中に、浴衣一つで寝ころんで、街の本屋で買つてくる本をあれこれと読み漁るのが、私の山荘生活の楽しみの一つであつた。

「二都物語」と「帰郷」

いろいろ読んだ中で、うまい料理でも食べたように、理屈なしにああ面白かつたと感じさせられたものは、ディケンスの「二都物語」とトマス・ハーデーの「帰郷」とであつた。両者の作風はずいぶん異つているが、しかし物語の筋の立て方や人物の性格などに、同じイギリスという風土から生れたものらしい共通の特色があつて興味をそそられた。

「二都物語」の方は、学生時代にも一度読んだという記憶があつたが、今度読み返してみて、一度も読まないに等しいぐらい、すつかり内容を忘れ去つていることに気がついた。この作品は、いうまでもなく、ロンドンとパリを中心にしたフランス革命の側面史というべき物語であり、自分の意中の愛人のために、彼女の夫の身代りとなつてギロチンのさびと消える性格破産者の弁護士カートンの高潔な人間愛が、作品の基調になつている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

強烈で陰惨な感銘

しかし、それにもまして強烈で陰惨な感銘を与えられるのは、復讐の血に狂つた革命派の市民の暴行の描写である。国王や王妃や貴族や金持連が断頭台に上せられるのは、止むを得ないとしても、しまいには、貧しい善良な庶民のだれかれをも、でたらめなきつかけでむやみに殺戮してしまう。人間の血を見ないことにはおさまらない悪魔の渇きが、革命派の市民の咽喉をやきからしていたのである。

こうして、フランス革命は、全世界に深刻な影響を及ぼしはしたが、革命それ自体としては、イデオロギーも組織も未熟だつたために、これという直接の成果もあげず、うやむやに終つてしまつたわけだが、私は「二都物語」の読後、断頭台を中心にした血なまぐさい描写を思い浮べながら、かりにいま日本に革命騒ぎが起つたら、どういうことになるだろうとあれこれと空想にふけつたりした。

暴力革命はご免

その結果は、やはり暴力による革命はない方がいいという考え方に達した。これは、私が保守的でおくびような性格であるせいかも知れないが、そればかりでなく、日本人は一時的に熱しやすいこと、非常時にニセモノやゴロツキや便乗者の徒輩がのさばりやすいことは、戦争中にも戦後にも、十分に

経験済みであること（彼等はいつかは正体を暴露するだろうが）、もつと大切なことは、私共は敗戦以来、人権や人命の尊厳であることをお題目のように繰り返し唱えているが、国土が狭小かつ貧弱で、人口が多すぎるという環境は、好むと好まざるとにかかわらず、人権や人命を軽視する心理（思想ではない）を私共の間に培つていること。——そういう条件を考慮すると、日本に起る革命騒ぎも相当に残虐な様相を呈するであろうと考えざるを得ないからだ。

——かかるが故に、私共の今日の公私の生活のゆがみや汚れが、いつ、どうして改められるかを考えると、絶望に近い気持を抱かされるものだが、それにもかかわらず私は、長い年月をかけてもいいから、やはり話し合いの政治を行つて、日本の国を少しずつ良くしていつた方がいいと信じているものの一人である。

——「二都物語」は偶然、そういうことを私に再認識させたことになるようだ。（昭和三十年九月）

私の服装三代記

私は明治三十三年に生れた。だから、明治、大正、昭和と三代にわたつて生きて来たわけだが、新しい天皇が位につかれるごとに年号が改まるとしても、私の一代はどうやら昭和で終りそうである。というのは、現在の天皇陛下はたしか私よりも一つ年がお若く、しかも私よりもはるかに健康でいらつしやるようだから、昭和が改元されないうちに私が天国（どうかな？）に召されることは、まず、まちがいのないところだからである。

私の生きて来た五十五年間に、日本は三回ほど戦争を経験している。日露戦争、第一次欧州大戦、それに今度の太平洋戦争である。前の二つは勝ち戦さだつたから、戦争が終つてかえつて景気が出たようなものだが、太平洋戦争は徹底的な負け戦さだつたから、日本は、物心両面で深刻な影響を受けた。その影響は今後も長く尾を曳いて、日本国民の上に作用していくことであろう……。

さて、幼い昔を思うと、日本もずいぶん変つたものである。服装の問題に焦点をしぼつてみても、たいへんな変りようである。私が生れた所は、青森県の弘前市で、一年の半分は雪に埋れて暮すので

あるが、そのせいで、子供のころの冬の服装が、まず懐しく目に浮ぶ。

下着から考えていくと、メリヤスの手製のシャツの上下、それからネルの襦袢、その上に縞の手織木綿の綿入れと、綿入れの羽織を重ねて着る。足袋は底の厚い、これも手製のものだ。履物は爪革のついた足駄か簡易スケート（方言ではベンザイと言う）だった。で、手織木綿の着物も、新しいうちは、藍の香がプンと匂ったりしてなかなかいいものだが、私たちのふだん着となるとそういうわけにはいかなかった。

子供だから私たちはよく洟を垂れた。すると、塵紙などというぜいたく品は持たなかったし、それかといって百姓達のように上手に手洟もかめなかったから、着物の袖口でつい洟をふいてしまう。そのあとが白く乾いて、子供等の着物の袖は糊を厚くつけたようにガバガバして、白く光っていたものだ。そればかりでなく、着物にはポケットがないものだから、懐をポケット代りにして、そこに焼芋、スルメ、みがき鰊、リンゴ、メンコ等を入れておくので、懐の中は、食物の滓が一杯にこびりつき、刺すような臭気が泌みついていたものである。

それで銭湯にもめったに行かないのだから、虱が湧かなければどうにかしている。じっさい、寝る前に囲炉裏ばたで、女中にシャツや股引の虱をとってもらうことが、冬の間の私達の日課の最後の仕事になっていたものである。

雪が降つても、マントはなく、クビマキと称して、長方形に裁つたネルの切れを、頭からダルマかぶりにして外を歩いた。学校に出かける時は、教科書や学用品を風呂敷に包んで、肩からはすかいにしよつたり、胴腹に巻きつけたりしたものだ……。そして、そのころは、女の子といえども、それと大差のない粗末な服装をしていたように記憶する。

いま私には、四つと六つの孫があるが、彼等のこざつぱりした服装を見ていると、今昔の感に堪えないものがある。ひとり服装の問題だけでなく、生活のすべての面にわたつて、貧乏は貧乏ながらに、われわれ日本人の社会生活が著しく向上して来ている事実は認めざるを得ないようだ。生活が向上するとは、生活する考え方が合理的になつて来ていることだ。

食物について言えば、昔は腹を満たせば足りるという考え方で、質より量本位だつたものだが、近ごろは栄養本位に考えるようになつたし、服装の問題でも、貧弱な肉体をきらびやかな着物でおおいかくすというやり方ではなく、まず身体をのびのびと発達させ、服装はその発達した肉体を引き立たせる役目を果たす——そういう傾向に変りつつあるようだ。

何でもそうだが、服装の場合、特に女性の人達は、服装は人間のためのもので、人間が服装のために存在するのではないということをハッキリ認めておくべきだと思う。（昭和三十年七月）

タロの話

四ヵ月前、自由ケ丘の石井漠さん（故人、舞踊家）から電話がかかつて来た。

「あ、あのね、石坂君」と例の親しみぶかいどもり声で「貴方のとこで秋田犬を飼いませんか。じつは近所の知り合いの家で、いい子犬が七、八匹生れ、可愛がつてくれる人に上げたいと言つてるんですよ。僕も一匹もらうから貴方ももらいなさい……」

「そうですか。それではもらいましようか」

そんないきさつで、生後三ヵ月の子犬が、私の家の庭で飼われることになつた。毛並は茶色で、口が黒く、額から鼻筋にかけて細いクマが通つていて、だいぶおどけた顔をしている。前足が太くたくましいのが秋田種らしくていい。タロと名づけた。タロははじめて母犬から離された夜も一と声も弱音を吐かず、南を受けた風通しのいい庭の芝生をかけまわつてスクスクと成長した。子犬のくせに、朝晩、洗面器一杯ずつの御飯をペロリと平げるのだから、その発育ぶりもまつたく目覚ましかつた。

六ヵ月目ぐらいには、背が伸び肉がついて堂々とした体クになつたので、いよいよ胴輪と首輪をは

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo